

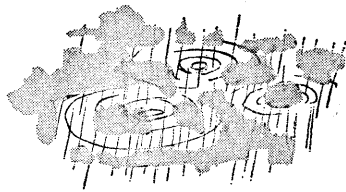
思いたつ心のおこるとき

——子どもの世界と出会いたいと——

河 辺 杲

最近、「誕生の詩」や「だれがわたしをわかってくれるの」など子どもに
いてのすばらしい写真集シリーズ四冊が刊行されているが、この著者であるス
エーデンの若きカメラマンのトーマス・ベリイマンが昨年春に来日した時の講
演の中で「なぜ私が子どもについて一生懸命になるのか」について次のような
ことを語っている。

二十年前に脳腫瘍で入院していた兄がその死ぬ少し前目が見えなくなってい
たが、病院の人々から「どうせ死ぬんだから……」といって自分を無視するよ
うな接し方をされたら泣きながら訴えていたことがとても印象に残っていて子
どもについて何かをしたいと思っていた。そこでカメラマンになって最初にし



た仕事は入院している先天性の障害児を撮ることだったが、そこで病院におきざりにされた、ほとんど胴体だけの子どもに出会った。その時から私は子どもから離れられなくなってしまった。そしてさまざまな環境の中で子どもたちの姿を撮って、「子どもとはいったい何なのか」という問いを全世界の人々に向けて発しなければと決心した。さらに特にこのことは子どもたち自身にいちばんよくわかって貰いたいと考えた。なぜならば子どもたちならこの社会をかえていくことができると思ったからだ…と。(傍点私) …

私にはこのペリイマンの声が怨念の叫びのようにも、また神の啓示のようにもきかれた。そして時間を経てペリイマンの子どもの世界との出会いの暖かく、強く、きびしいものを感じると共に二十年前も今日も少しもかわらず弱い子どもたちは勿論、多くの子どもたちが世界のいたるところでおきざりになっているという厳粛な事実にはハッとさせられ、もっとこうした事実を直視しなければと考えさせられたのである。しかも彼は事実の直視のみでなくフォト・ドキュメントという自己の特技をいかしてこれを通して世界の人々へ「子どもとは…」をアップビルすることをおし進めてきている。しかもこの問題解決を大社会に期待せず子どもたち自身に期待を寄せることに注目せずにはおられないのである。問題の深さや重みからこれを解決する空間と時間の余りにも

足りないのを感じるだけでなく、ベリイマン自身が大人社会の識見やその実践への意欲や実践力に対しての失望感や不信感をすらもったのではなからうかとさえ感じられるのである。私たちはこのベリイマンの一語一語を世界の大人たちへの叱咤と聞いてよいのではなからうか。

ところで、このベリイマンがもったような子どもたちの世界と出会いたいと「思いたつ心」はその内容や度合いの程は異なっても、恐らく誰にもあるように思われる。直接子どもとの教育の場にある実践家や子どもを育てている両親は言うまでもなく、またどれ程理論ばかりを追求している研究者やこの方面の政治に関与している行政家といえども子どもたちの世界と出会いたいと思いたつ心をおこされていることと思う。

しかし、問題は子どもたちの世界との真の出会い——感動のある出会い——があったかどうかによってそこには大いなる差異のあることを認めねばならないと思う。「真の出会い」とか「感動のある出会い」と言ってもその体験の深淺は多様であり、またそこには必ず自ら発動する生長しようとする生命力をもった代理不可能な存在としての人間への尊敬と信頼としか言いようのない何ものかが生じていることは言うまでもない。また「思いたつ心」とは思考するのみでなく現実化への努力がなされてはじめて「思いたつ心」と言い得るのである。



さらに私が言いたいのは「思いたつ心のおこるとき」なのである。それは「発心」と言ってもよいであろう。それはまさに自然にわきおこる情緒が大事なのである。

フレーベルが二十五歳ではじめて子どもとの教育にたずさわった時の感動を兄への手紙の中にしたためた一節からもフレーベルの「思いたつ心のおこるとき」がひしひしと迫ってくるのをおぼえるのである。

「私は今までまだ見たことのない、しかし常に懂れて居り、常に欠乏を感じていた何物かを発見したような心持ちがしていました。ちょうど私の生が遂にその天賦の要素を発見したようなものでした。…私は魚が水を得た如く鳥が空を翔け上り得た如く幸福を感じました」と。そして彼は生涯この感激に生きつづけたのである。

「国際児童年」というメッセージがあちこちでとびかわされているが私たちは「子どもの世界に単にひかれる心」に終らないよう子どもの世界に出会いたいと思いたつ心のおこるときをそれぞれが確認しあいつつ、躊躇なく共にその現実化に努力したい。

(洗足学園短大)